

「日本海ルートでつながる筑紫と吉備」

NPO 法人福岡歴史研究会副理事長 石合 六郎

<はじめに>

岡山県倉敷市矢部にある、弥生時代最大の墳丘墓・楯築遺跡はいつごろの築造であろうか。倉敷市のホームページでは「弥生時代後期」とされている。西暦年代では研究者によって大きく異なる。これは弥生時代の設定がいまだに動いているからだろう。しかし、筆者は楯築遺跡が邪馬台国の女王・卑弥呼の時代に重なると考えている。その理由は論考が進むとともに明らかになる。卑弥呼は239年に魏の皇帝から五尺刀を拝受している。その墓・卑弥呼の眠る墳丘はまだ謎のベールの向こう側だ。

楯築遺跡の墳丘には30キロの朱と共に47センチの鉄剣（直刀）が埋葬されていた。筑紫と吉備の鉄剣文化の謎に挑んで見よう。両刃の鉄剣が「剣」、片端の鉄剣が「刀」とされているが、古典文献でも実際は混同して使われるケースが多いといわれる。今回の筆者の論考でもあいまいな使い方もある。ご了解いただきたい。



楯築の王の棺に朱と共に葬られていた47cmの鉄剣

<1> 神話の剣を探る

◎吉備にあった鉄剣・素戔鳴尊の剣

日本書紀^{あるふみ}の一書（第三）には「素戔鳴尊が、蛇を斬られた剣は、いま吉備^{かむものお}の神部（神主）のところにある。尊が^{おろち}大蛇を斬られた地は出雲の簸の川の上流の山である」（「全現代語訳日本書紀」宇治谷孟p49）とある。吉備は出雲との関係が極めて深い。弥生時代の「クニ」あるいは、その前段階の地域国家だったのである。素戔鳴尊の剣についてはこのシリーズの第7回と第8回「素戔鳴尊の剣（上）（下）」（2022.01、04）で詳しく論じてきた。伝承と新資料から「天之羽々斬剣は確かに吉備にあり、崇神天皇の御代、吉備津神社へ、その後、仁徳天皇の時、大和の石上神宮に移され、明治7年に菅政友によって掘り起こされご神体になった。吉備津神社にはレプリカと思われるものが、今も保存していること、剣の長さもおおよそその90センチ前後である」（筆者の仮説）ことを発掘できた。

◎鉄剣に宿る神話性

この事実は古事記や日本書紀に登場する剣により真実性を与えてくれた。単なる神話で

はなく、日本国家誕生にかかわっているのだ。

一つ断っておきたいことがある。筆者は安本美典氏の「天皇在位平均一代10年前後説」に従い、「天照大御神は卑弥呼であり、天照大御神が住む高天原は邪馬台国」と考えていることだ。この説で多くのことがうまく説明できる。

日本古代史上に誕生した三種の神器のうち、鏡については三角縁神獸鏡を卑弥呼の鏡との思い込みから抜けられない考古学者だが、劍（刀劍）については、意外に現実的な対応が見られる。「<2>儀仗化と日本海ルート」で引用させていただいた「刀劍が語る古墳時代の幕開け」のパネルディスカッションに登場した考古学者らは、素直な年代観で刀劍について語っているようだ。岡山県教委の石田爲成氏、以外は、刀劍の普及ルートが日本海側であることを語っている。

◎卑弥呼の劍

繰り返しになるが、卑弥呼は魏の皇帝・明帝から「五尺刀」（魏の尺貫で五尺、120センチ）二口を下賜されている。現在、弥生時代から古墳時代にかけての劍は非常に多く、未発掘物を含めれば、まったく想像がつかない数だろう。しかし、この五尺刀、1メートル20センチ前後もある刀は極めて少なく、その候補として認識されているのは10振りに満たない。河村哲夫氏の論考「卑弥呼の使者たちと『五尺の刀』」では候補として7振りをあげている。それに筆者が2振りを追加したのが下記表である。



上町向原遺跡出土の五尺刀
伊都国歴史博物館蔵

国内での五尺刀候補一覧（①～⑦までは河村哲夫氏データ）

①	「上町向原遺跡」から出土した鉄製素環頭大刀（福岡県糸島市）
②	谷畑古墳(奈良県宇陀市)
③	東大寺山古墳(奈良県天理市櫛本町)
④	会津大塚山古墳（福島県会津若松市）
⑤	ホリノヲ4号墳(奈良県天理市豊田町ホリノヲ)
⑥	会津大塚山古墳（福島県会津若松市）
⑦	石上神宮(奈良県天理市)から出土した金象嵌大刀
⑧	向日市・寺戸大塚古墳出土（京都府向日市寺戸町芝山）＝註1
⑨	佐賀県吉野ヶ里市三津出土（佐賀県吉野ヶ里市）＝註2

以上のうち卑弥呼の剣の候補はどれであろうか？ ⑦までの部分の表作成者の河村氏は第一候補は①の糸島市「上町向原遺跡」出土鉄製素環頭大刀としている。その次に有力な剣として③の東大寺山古墳(奈良県天理市櫛本町)刀としている。

その理由の要旨をまとめると、次のようになる。

①の「上町向原遺跡」出土刀は長さが 118.9 cmで魏の 5 尺 119.0 cmに限りなく近い。時代も弥生時代後期で、化学分析により 1 世紀後半～2 世紀前半に中国産の鉄鉱石で作られたことが判明している。所在地の伊都国は一大率が置かれ、魏の使者たちが滞在、魏との交易品などの検査を行った。伊都国王がいた、とする。

③の「東大寺山古墳出土・金象嵌銘花形飾環頭大刀」はもともと素環刀であったものをのちの時代に付け替えている。中央に三葉環を置き、周囲に鳥形の飾りをつけている。刀身には、「中平●(年)五月丙午造作文(支) 刀百練清剛上応星宿●●●●(下避不祥)」と金象嵌文字が刻まれている。「中平」は後漢の年号で、西暦 187 年～190 年に相当し、刀身部の特徴などから中国製の金象嵌鉄刀とされている。科学分析によると、金象嵌の金の純度は 99.3%以上で、不純物の銀などを除去する高度な技術が用いられている。

したがって、中国で製作後日本列島に運ばれ、4 世紀ごろ独特な形態の環頭部(かんとうぶ)に付け替え、4 世紀半ばごろ--中国で製作されてから 150 年以上経ったところに、古墳に埋納されたと考えられる。その結果、卑弥呼が魏から授与された「五尺の刀」の有力候補の一つと考えられる。

東大寺山古墳が所在する天理市櫛本町には、和珥神社も祭られていることなどから東大寺山古墳を含む櫛本古墳群は和珥氏の墳墓群とみられている。

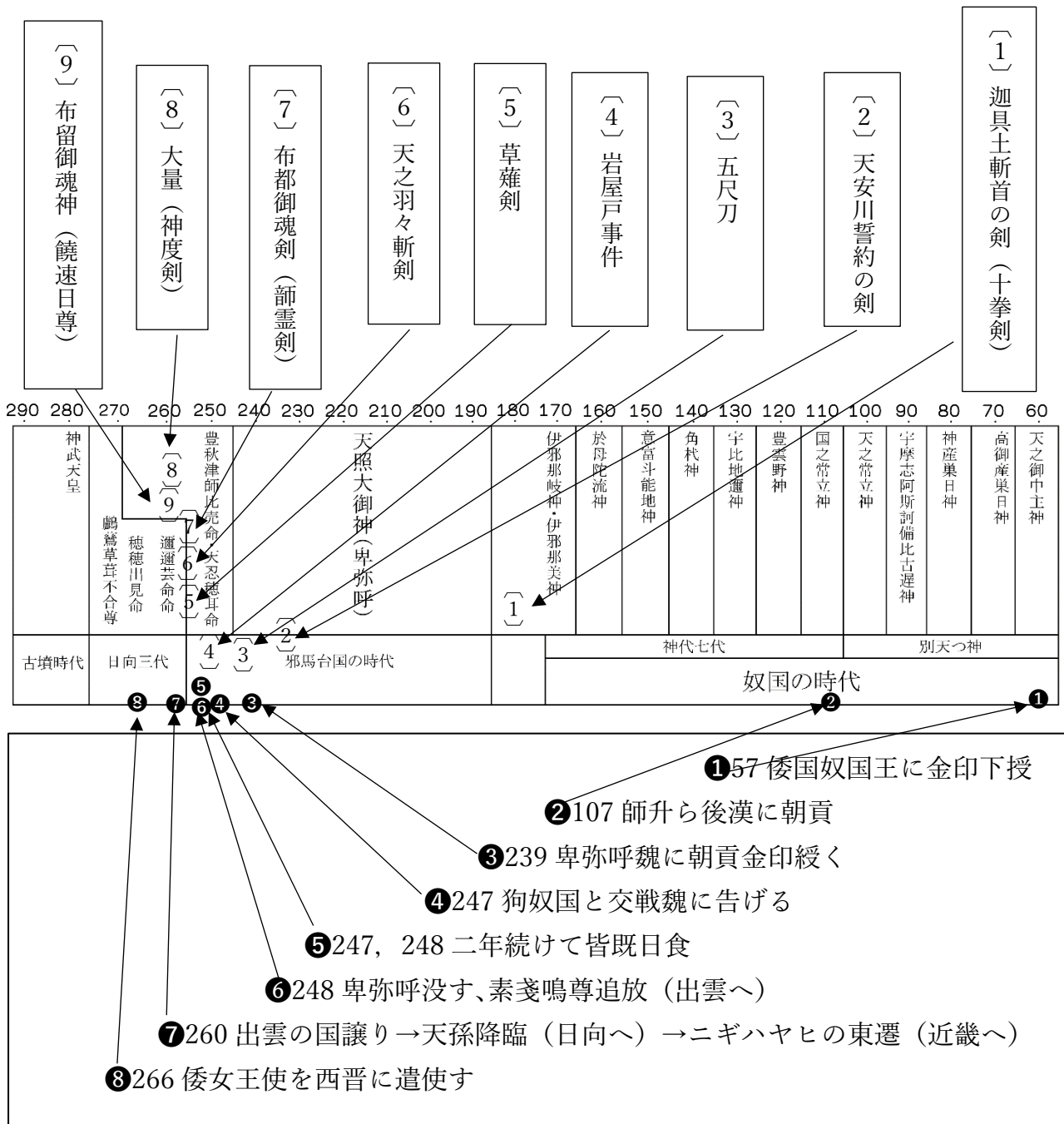
和珥氏は、第 5 代孝昭天皇の皇子・天足彦国押人命(天押帯日子命)の末裔で、大和政権の外征に参軍して軍事的な業績を上げたことから、この伝来の銘刀を授与されたとも考えられるとする。(五尺刀については 3 章「◎神になれなかった剣」の項で再度もふれる)

◎年代表に神話の剣を重ねる

いよいよ、エポック年代表のバージョンアップに入る。

この表は弥生時代に当たる西暦 57 年の「漢奴国王」の金印を後漢の洪武帝から下賜された奴国王のいた 60 年をスタートとし、神武天皇が大和に入り踐祚した後のいわゆる古墳時代が幕を開けた 290 年までの年代表に歴史的エポック①～⑧までを表の下に表示した。表の上には 8 つの神話の剣と魏王朝下賜の五尺刀を年代の位置にカッコ数字と矢印で分かるように表示した。

神話時代のエポック事象年代表



この表で248年の卑弥呼の死の年の後にエポック事象も、神話の剣も集中する。これはまさに永い倭国大乱を収め、治安を回復した卑弥呼（初代）の成果だったが、男王（須佐之男命）の反乱で心を痛めた、女王・卑弥呼が急死、天の安川の衆議で男王を追放、わずか13歳の新しい女王（台与＝豊＝豊秋津師比売命）の時代を迎えた。邪馬台国（高天原）大発展時代にはい

った。

これは古代の民主主義といえば大げさであるが、倭人伝に「租賦を収む」とあるように税金を徴収するが、人々の安寧な生活を守ろうとする本当の国家の姿を追い求めた小

さな一歩だったに違いない。これは今も国家の最終的目標なのだ。

神話に登場する剣一覧

(古事記と日本書紀から抽出)

	剣の名前	推測長と形	登場の場面	推測年代	注及び掲載文献
〔1〕	迦具土斬首の十拳剣	95cm 推定・素環頭刀	伊邪那美の命が火の神を生み、ほとが焼けたことで死んだ。伊邪那岐が怒り吾子・迦具土の首を斬った時の剣（古事記上つ巻・伊邪那岐と伊邪那美の項の5火神被殺）	180～190年ごろ	この2つの剣は、同じもの
	伊賦夜坂の十拳剣	95cm 推定・素環頭刀	伊邪那岐が黄泉比良坂で、伊邪那美の追手から逃れるために後ろ手持ち振りつつ逃げ、桃の霊力で助かった場面（古事記上つ巻・伊邪那岐と伊邪那美の項の6黄泉の国）		
〔2〕	誓約の時の剣 十拳剣、九拳剣、八拳剣	95～76cm 推定・素環頭	日の神がまず十握剣を食べられて生まれたのが瀛津島姫命（市杵島姫）、九握剣から湍津姫命、八握剣から田霧姫命（田心姫）が生まれる。天照大御神の玉からは6柱の男神が誕生する。（書紀神代上の素戔鳴尊の誓約の一書・第三）	235～238年ごろ	岩屋戸事件までに10年ある。
〔3〕	卑弥呼が拝受した五尺刀	118cm 推定・素環頭刀	魏の明帝が金印と共に、五尺刀2口を与えている。魏の寸法で5尺は118cmで、人間が扱うにはやや長すぎる。したがって、儀仗的な性格と思われる。国内でこの寸法の剣が複数本見つかっている。紀元前の前漢時代の物との説もある。	239年	卑弥呼の魏への遣使の年
〔4〕	岩屋戸事件	—	素戔鳴尊の高天原での乱暴に耐えかね、岩屋にこもった天照をこの世に戻そうと、神々がイベントを仕組んだ結果、この世に光を取り戻すという神話といえる。	248年ごろ	卑弥呼の死
〔5〕	草薙の剣（天ノ叢雲剣）	不明	須佐之男命が八俣大蛇を退治した時の剣。尾を斬った時、刀の刃が欠け、尾っぽを割いてみると、都牟刈の大刀があった。天照大御神に献上した。のちに草薙剣といわれる。現在、熱田神宮に祀られている。ご神体でお姿は不明だ。	250年ころ	現在、名古屋市の熱田神宮に祀られている

〔6〕	天之羽々斬劍（布都斯魂劍）	90cm 前後	須佐之男命が八俣大蛇を退治した刀。十握の劍として有名。オロチの尻尾を斬った時、草薙の劍に当たりカチンと音がして刃こぼれを起こしたといわれる。 この刀は日本書紀によれば、吉備の神部（かんとも）のもとにあったが、大和の石上神宮に移され、明治期の宮司・菅政友によって禁足地から掘り起こされ、同神宮のご神体となっている。 蛇之籠正、蛇之韓鋤、天蠅斫の名もある。	250 年ころ	書記には岡山市赤磐市に石上神社があったが、後に奈良の石上神宮に移されたとの記録がある
〔7〕	建御雷神の天之尾羽張劍（布都御魂劍＝劔靈劍）	95.5 cm	この劍がいわゆる平国の劍だ。建御雷神の神が稲佐の浜で、この劍をさかさまに立て、その上に座り大国主に国譲りをせまった。佐士布都の神、布都御魂劍、劔靈とも記される。 神武天皇が紀伊半島で難渋しているとき高倉下の蔵に屋根を破って送られてきて、一気に勢力を回復した。	250 年ころ	奈良の石上神宮では明治7年発掘の劔を劔靈劍としているが、同11年発掘の素環頭太刀(C)の可能性が高い
〔8〕	大量（神度劍）	95cm 前後 十握の劍	天孫降臨に先だち遣わされたが、大国主に籠絡された天若日子が、天からの矢で射殺される。その葬儀に訪れた阿遲鉏高日子根神が持っていた劍。弔われる天若日子と阿遲鉏高日子根神は義兄弟だが似ていた。死人と間違われ怒る。劍で喪屋を切り伏せ、蹴り飛ばすと、美濃國まで飛んで行ったという逸話がある（古事記）。	255 年ころ	登場の場面以上の情報はない
〔9〕	布留御魂（饒速日尊所持）	76 cm 前後 八握の劍	饒速日尊は、高天の原から降臨のさいに十種の瑞宝を、天神の祖から与えられた。十種の瑞宝の中に布都御魂劍（八握劍）がある。子の宇摩志麻治の尊が神武天皇に献上、崇神天皇の時、物部の祖の伊香色雄が、まとめて石上の高庭に移した。	260 年ころ	天璽瑞宝十種とも記す。高庭から掘り起こされた劍の中に含まれるかは不明

劍の表に岩屋戸事件を入れた。イレギュラーだが、理解しやすくするなったと思う。あくまで事件を年代順に並べたが、筆者の思い込みもあり前後しているかもしれない。今後ブラッシュアップを図りたい。

< 2 > 劍の儀仗化と日本海ルート —地方の考古学者の声—

令和4年に岡山市で「刀劍が語る古墳時代の幕開け」と題する講演会が開かれた。コロナ禍の真っ最中で聴衆なしで開催されインターネットで動画とPDFで公開されている。期せずして弥生時代の日本海文化圏の各地の考古学者が登場、刀劍文化を語っていた。

◎吉備一住居廃絶へ鉄剣の祭祀

【石田為成氏＝岡山県古代吉備文化財センター主幹＝発言の要旨】

★①岡山市の百間川原尾島遺跡で全長 8.5 cmの小型鉄剣が出土したが、意図的に住居を燃やしている。

「住居廃絶儀礼」として、使用されていた可能性がある。②弥生時代の後期から終末期にかけて墳墓に主に鉄剣が副葬される。すでに階層性が認められ、

最高ランクは 47 cmの楯築遺跡、次いで長さ 38 cmと 25 cmの 2本の短剣が出土した女男岩墳丘墓、3番が岡山市みそのお 42号墓の短剣で長さ 16 cm、4番は長さ 20 cmの鉄剣が出た岡山県浅口市の城殿山遺跡だ。これらは北部九州との交流品の可能性が高い。

③吉備の首長層は、恐らく瀬戸内海ルートを使った流通に関与、北部九州からの鉄剣や玉などを獲得していたのではないか。

	遺跡名	刀剣出土数
①	百間川遺跡	1
②	楯築遺跡	1
③	みそのお 42号墓	1
④	男女岩墳丘墓	2
⑤	備前車塚古墳	2 + α※
⑥	浦間茶臼山古墳	1 (盗掘)
※は最初の発掘後に鉄刀、鉄剣の破片を確認、⑤と⑥は実際より古く判定されている。		

◎筑紫一倭人伝の国々抱える

【城門義廣氏＝福岡県教育庁文化財保護課主査＝発言の要旨】

★①北部九州の弥生時代鉄刀文化は吉武樋渡墳丘墓からはじまり、中期の後半になると、素環頭刀、剣や矛、鉄戈が出るようになり、弥生時代の後期の後半くらいに鏡と素環頭刀のセットが成立する。②鉄製刀剣が副葬されるお墓の最上ランクは、三雲南小路や須玖岡本遺跡で、鏡の量によってあらわされる。③鉄製武器の位置付けは下のランクで、鉄製武器についても、最上位首長の独占というわけではない。④弥生時代の後期後半の平原遺跡の状況からは銅鏡が 40面が出土、素環頭の大刀、長さ 80 cmほどの大刀 1本が出ている。

◎越（石川県）－鉄製武器は日本海ルートで

【林大智氏＝公益財団法人石川県埋蔵文化財センター主幹＝発言の要旨】

★①弥生時代中期中葉の北部九州へともたらされた鉄製武器は、続く中期後葉になると、西日本各地に広がり、山陰から北陸にかけての日本海沿岸域に、多くの鉄製武器が認められる。日本海沿岸域の刀剣類は、すべて集落遺跡から出土する。②鉄製武器が導入された日本海沿岸域では、鉄製刀剣の副葬が弥生時代後期前葉から始まる。③日本海沿岸域で鉄

製武器を副葬する墳墓が増加するとともに、分布域も非常に広くなり、北陸の東端に位置する新潟県村上市の山元遺跡まで到達。④古墳出現前夜にあたる弥生時



素環頭刀の環頭部裁断と直刀の成立

〈挿図・写真の出典〉①：大阪府立弥生文化博物館 2005 『北陸の玉と鉄 弥生王権の光と彩』 ②：豊島直博 2010 『研究論集 16 鉄製武器の流通と初期国家形成』 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 ③：佐々木勝 2002 『福井県の鉄製品の様相—北陸地域の墳墓出土資料を中心として—』 『平成 13 年度環日本海交流史研究集会 鉄器の導入と社会の変化』 財団法人石川県埋蔵文化財センター ④：奈良県立梅原考古学研究所編 2018 『黒塚古墳の研究』

代終末期には、山陰地域で素環頭を裁断し、新たな環頭をつないだ“直刀”が多くなる＝上図参照。⑤北近畿地域では、短剣が主体となった副葬、武器の構成に大きな変化が確認され、素環頭大刀や刀を副葬主体とするものが出現することに加えて、把を取り付ける部分である“茎（なかご）”が、長い短剣が出現する。⑥一方、北陸地域では、素環頭刀や、もしくはその環頭部分を裁断した鉄刀が副葬の主体となり、これに短剣が加わる組み合わせが主流になった。富山市杉谷A遺跡で見つかったような、茎幅が狭くて、環頭が大きい素環頭刀は、この期の北陸の特徴的な形態と指摘できる。

◎出雲一玉づくりが鉄製刀剣の財源

【君嶋俊行氏（司会）＝公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室室長＝発言の要旨】

★①北部九州では素環頭が多く、山陰・北陸では素環頭を持たない刀が多い。②その理由は素環頭裁断が多いからだ、それは同時に大陸・朝鮮半島からの輸入品する財力があつた



からだ。③玉作りの遺跡が集中し、その地区と鉄刀の分布が集中する地域とほぼ重なる。鳥取市の青谷上寺地遺跡は青銅鏡や鉄器といった大陸・半島由来の貴重品が数多く出土し、「地下の弥生博物館」とも呼ばれる。④石川県で採れた碧玉、緑色凝灰岩といった石材を使って玉作りをしていた。北陸産の石で作った管玉、首飾りは北部九州の甕棺墓からたくさん見つかる。弥生時代の日本海沿岸では、山陰・北陸地方の特産品である玉と西方からもたらされる鉄とを交換する交易が行われていた。⑤鉄刀を入手できた日本海沿岸の力というのは、鉄の対価、見返りとなる玉を豊富に産み出す力であったと考えられる。

◎越（福井）―首長間で四隅墓文化共有

【三原翔吾氏＝福井県教育庁埋蔵文化財調査センター主査＝発言の要旨】

★①四隅突出型墳丘墓といわれるお墓は全国で 100 例ほどあるが、（山陰に）次いで北陸に多い。②北陸では四隅突出型墳丘墓というのは、点的に分布しているだけで、方形の墳丘墓が主体。③山陰のものは、石貼りだが、北陸のほうは少し変容し土をそのまま削り出して墳丘を作る。④北陸の中で一早く入ってくるのは、福井県の北のほう。⑤弥生時代後期後半に墳丘長 30 m 超の小羽山 30 号墓が造られる。山陰と北陸の首長間の交流によって四隅突出型墳丘墓を介し文化を共有。⑥同墳から剣 1 点が出土している。

<3> 武器から国家形成の象徴に

◎剣は神である

天照大御神と素戔鳴尊の誓約^{うけい}では、武器である剣から宗像三女神^{たま}が生まれた。瓊^{たま}から生まれた 3 人の男神のひとり・忍穂耳尊が後の天皇家の先祖となる。

剣からは女神の誕生だったので、この誓約の説話がすぐに剣と権力を結びつけたわけもなかろうが、古代では武器としての剣の役割より、儀仗の役割が大きかったのではなかろうか。

日本刀の歴史を振り返ると、殺傷兵器の中心は『弓矢』であった。歴史家で古剣道の宗家である加来耕三氏は「日本人が大切にしてきた日本刀は、実のところ合戦で主力の武器となったことは、史上、一度もなかった。鎧兜を身にまとった武者(武士に対する殺傷性で、一番高いものは弓の矢である。源平合戦の時代から、鉄砲が登場するまでの合戦で、内容が明らかな史料を筆者が漁ったかぎり、殺傷の六割を誇っていた。ついで薙刀

(のちの槍)が二割程度。残念ながら刀剣はそれにつづく三位でもなかった。薙刀・槍について殺傷性の高かったのは、投石や礮であり、これらが一割強あったのに比べ、刀剣は実質、一割にも満たなかった。」
〔「刀の日本史」 p 103～104〕といわれる。

それでも古代から剣は国家権力の象徴として、今も受け継がれている。皇室には御代替わりの儀式として剣璽の儀が存在する。草薙の剣だけでなく、いまもいくつかの神話の剣がある。幸せなことである。

◎草薙剣は最高神

草薙剣は前章の繰り返しになるが、素戔鳴尊が八俣の大蛇を退治して、その尾っぽから出てきた剣とされている。これはどこまでも神話であると片付けられてきた。本当にそれでよいのだろうか？ 神話は事実ではないし、八俣大蛇はいないし、尾っぽにそんな大きな刀を体に入れて生きていける蛇もいないだろう。「オロチ」と名乗る八人の与太者がいて、人々を苦しめていたとしたらどうであろう。それを助けることができた英雄がいたら、こんな神話ができてもおかしくはないであろう。

◎神になれなかった剣

神になれなかった剣もある。卑弥呼の剣といわれ五尺刀はどうだったのか？ 「<1>神話の剣を探る」で、現在、9口が可能性ある刀剣として取り上げた。①「上町向原遺跡」から出土した鉄製素環頭大刀（福岡県糸島市）は、かなりの確率で本物の可能性があるが、

コラム 禁断の剣を見た男たち

草薙剣はだれも見ることができないが、史上2度（ともに江戸時代）にわたって盗み見た神官がいた。その事件の関係者も罰せられ証言もわずか。そのため今も銅剣なのか鉄剣なのか、その姿形もわかってない。

安本美典氏は調査の結果、栗田寛の『神器考証』（1897）に記録があることを突き止めた。それには「長さ五尺(1.5m)の木の箱のなかに石の箱があり、赤土が詰めてある。(石

刃は菖蒲、握り手は魚の骨

の)箱のなかにクスノキの内側をくり抜いてなかに黄金を敷いてその上にご神体(草薙剣)を

置いていた」「ご神体(草薙剣)の長さは二尺七～八寸(81～84 cm)ばかり、刃先は菖蒲の葉なりにして、中ほどはむくりと厚みあり。本(柄)の方は六寸(18 cm)ばかりは筋立ちて魚などの背骨の如し。色は全体に白し」とあった。これではイメージがわからない。季刊邪馬台国62号の口絵には候補となる6枚の写真が並ぶ。のうちの写真5「朝鮮の有柄式鉄剣、慶尚南道良洞里出土(東義大学博物館)」は柄が青銅、刃が鉄製で表現に一部かなっ



写真5 朝鮮の有柄式鉄剣 慶尚南道良洞里出土(東義大学博物館)

ているようにも思える。筆者の判断で選んだが、鉄剣部分がさびていないとしても、草を簡単になぎ倒せるか。当面公開される可能性はない。その時まで深い深い謎だ。

卑弥呼に下賜されながら、発掘された遺跡は最高権威者の墓にふさわしくない（墳丘のかたちは不明で、鉄刀は石棺外に置かれていた＝伊都国歴史博物館談）。謎は深い。

筆者の見解だが、古事記や日本書紀は外国との冊封体制には触れたことがない。独立国の自覚が強かったのではなかろうか。たとえ遠い過去のことでもそうするのが外交の常道であろう。

となると二口の刀剣を持っていたのは、卑弥呼（天照大御神＝初代卑弥呼と二代卑弥呼・台与）ではなく、卑弥呼の遣使・難升米と牛利に再下賜されていれば、鉄刀を出した遺跡はがぜん注目すべきで、銀印をもらった2人のうちのひとりかそれぞれの子孫の墓か、彼らの関係者の墓となろう。残念ながら神になれなかった剣といえよう。

河村氏が第四候補と指摘する「石上神宮の金象嵌大刀」が五尺刀なら、河村氏が言うように皇室経由か、筆者がいうように難升米か、牛利かを通して、最終的に石上神宮にたどり着き、祀られたので神になったといえるのだろう。

こんな偶然や永い年月のうちに忘れられ、神になりそこなった多くの剣があることだろう。

<4> 日本海ルートで吉備へ

弥生時代鉄刀の分布(集落出土の小破片を除く)



○素環頭あり ●素環頭なし ○玉作り遺跡の集中地域

1 川床 2 東平下 3 牛戻 4 みやこ 5 横田 6 三津永田 7 二塚山 8 桜馬場 9 中原 10 平原 11 向原
12 東入部 13 吉武 14 飯倉 15 丸尾台 16 琴ノ宮 17 仮塚南 18 汐井掛 19 郷屋 20 穴ヶ葉山 21 宮
山 22 阿弥大寺 23 宮内第1 24 青谷上寺地 25 門上谷 26 鑄物師谷 27 妙楽寺 28 筒江中山 29 内
場山 30 崇禅寺 31 三坂神社 32 左坂 33 木崎山城跡 34 王山 35 塚越 36 原目山 37 乃木山 38 袖
高林 39 吸坂丸山 40 寺井山 41 東荒屋ナカサイ 42 七野 43 金丸ゴロジヤマ 44 杉谷 A 45 原田北

※14 県集成研究の成果を基に作成

◎瀬戸内海ルートがない

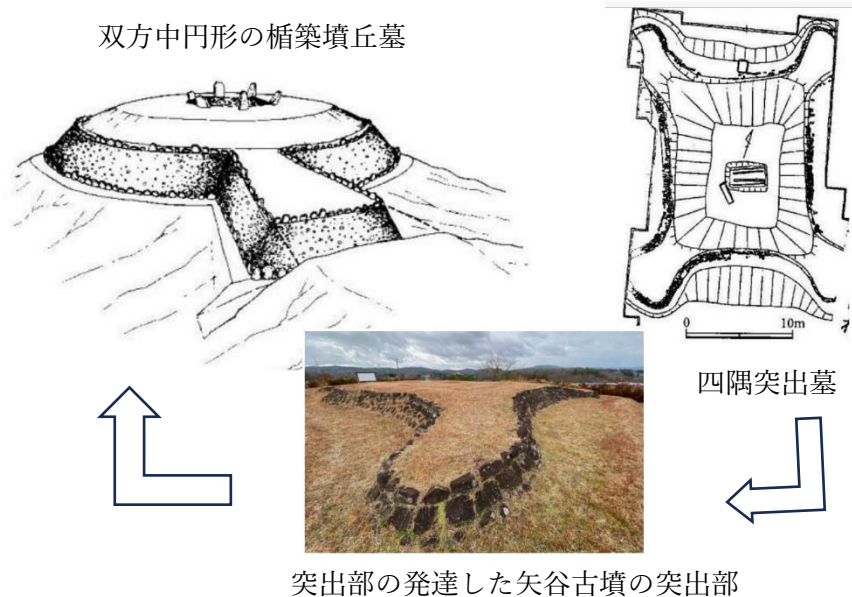
前ページの地図は「刀剣が語る古墳時代の幕開け」のパネルディスカッションで使われたものである。驚くべきことに、弥生時代の鉄刀の分布の地図に瀬戸内海側にはたった1つあるだけだ。一瞬、楯築遺跡と勝手に思ったが、よく見ると26とあり、「^{いぶしだに}鑄物師谷」だった。このシンポジウムに参加していた石田さんに問い合わせたところ、この図は「弥生時代鉄刀の分布」となっており、両刃の剣はカウントしてない。鑄物師谷2号墳からは鉄刀が出土している。現物は紛失している。日本海側は剣より刀の方が圧倒的に多い、剣に比べ刀はより新しい文化だ」という。おかやま全県統合型G I C・埋蔵文化財（遺跡）の情報には、「(2号墳は) 一辺 30m の長方形の封土。少なくとも竪穴式石槨4基、木棺直葬墓13基が埋設されている。築造は弥生時代末まで遡る」とある。特殊器台で有名な宮山墳墓群と約1キロと近い。吉備中枢部と日本海文化との関連をうかがわせる。

さらに言えば日本の古事記、日本書記が伝える弥生時代と思われる神話時代には出雲や越のことが登場する。出雲のことは古事記では三分の一を占める。古代吉備への文化の流入経路として出雲を考えてよさそうだ。

◎双方中円墳と四隅突出墓

何人かの人ですでに述べているが、「楯築遺跡の双方部は四隅突出部の発達したもの」との考えは合理的かもしれない。四隅突出墓とされる矢谷古墳（広島県三次市）の突出部をうんと長くすれば楯築遺跡の双方部といなる。吉備の古代史に詳しい佐藤光範氏は備後北部で発生した四隅突出型墳丘墓が吉備中枢にきて双方中円墳になったと述べている。他にもいるか

四隅突出型墳丘墓から双方中円墳への発達模型図



突出部の発達した矢谷古墳の突出部

出雲地域で発生した四隅突出型墳丘墓は吉備地域に当たる備後北部の多く存在、美作地域に分布する。その一部が突出部を2つに減らして、さらに発達した形が吉備中枢部に存在する楯築遺跡と周辺の双方中方墳の可能性はある。

もしれないが、文献的には佐藤氏が早い。前ページの図は筆者が独自に図表化してみた。

◎築造年代を巡って

楯築遺跡の築造年代については、学者によって異なっているが、文明動態学を掲げ、今や著名な考古学者・松木武彦氏（国立歴史民俗博物館教授、元岡山大教授、註4）は同遺跡の被葬者について月刊誌「一個人」（KKベストセラーズ社刊）のインタビューで次のように語っている。少し長いがそのまま引用した。

「日本列島では古代から権力や権威を『墓』によって示してきました。人が集まり、国家を立ち上げていく過程で、人心を一つにまとめるために、巨大なモニュメントの築造が不可欠だったのです。最も大きく立派な墓に、その時代の王＝古代日本である倭国（わか）の王が葬られたと考えるのが自然ではないでしょうか」

（編集部）日本におけるモニュメント築造の歴史には、3つの波があったと松木氏はいう。

「第一波が紀元前1世紀頃の北部九州の甕棺墓群（かめかんぼぐん）だ。甕棺とは素焼きの甕を棺にしたもの。大量の鏡や青銅（せいどう）の武器など豪華な副葬品が入っている大型の甕棺は、仮に北部九州の勢力を筑紫王権（つくしおうけん）と呼ぶとすれば、その王の墓と考えられる。その後に登場する有名なモニュメントが、卑弥呼（ひみこ）の墓といわれるヤマトの箸墓古墳（はしはかこふん）だ。「私は卑弥呼の墓は第三波で、北部九州とヤマトの間に第二波があり、それは中国の史書『後漢書（ごかんじょ）』に登場する『倭国王帥升（わこくおうすいしょう）』の墓ではないかと考えています。帥升がいた弥生時代後期後半において、ずば抜けた規模と内容を持つ墓は、楯築墳丘墓において他には考えられません」

（編集部）松木氏の持論はこうだ。

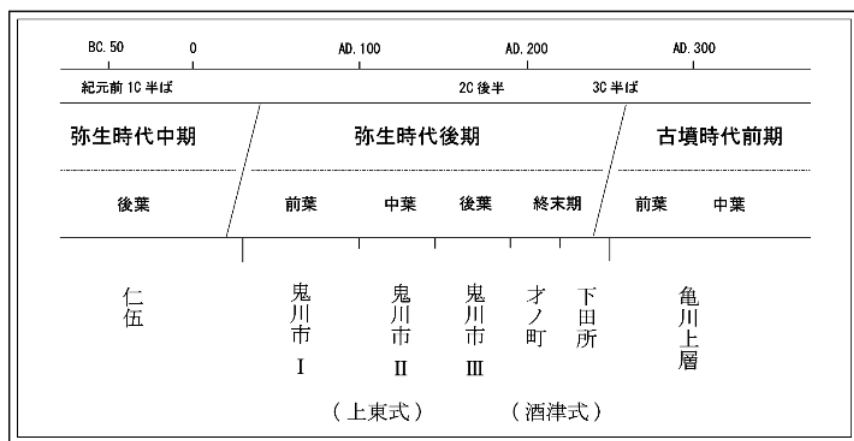
「第一波が起きた九州は、倭人の社会の富や権力を集中させるには西にありすぎた。列島の真ん中あたり、東海道、東山道、瀬戸内ルート、さらに北陸や和歌山につながるルートが交差する十字路にヤマトがある。端っこの九州から中央のヤマトへと国の重心が移動する途中、いつとき中間の吉備の地に力を持つ王が現れ、列島を、九州とヤマトを牽制しつつ掌握した時期があったのではないか。その時の倭王こそ帥升であり、この偉大な王を葬ったのが空前絶後の墓として君臨する楯築墳丘墓というわけだ。」

「また、三代目の倭王、卑弥呼の墓といわれるヤマトの箸墓古墳からは、楯築墳丘墓と同様の特殊器台（とくしゅきだい）という吉備独特の土器が見つかっている。「最初の前

方後円墳といわれる箸墓古墳のデザインは楯築墳丘墓のデザインからの発展形であり、墳丘には楯築と同じように特殊器台を設（しつら）えています。卑弥呼の墓は、前王である帥升をリスペクトしつつ、その墓を参照して築造されたと考えることも可能です」（註4）

※「(編集部)」の書き込みは筆者が追加した。

◎ “とんでも論、的発想



土器編年との対応

(岡山市埋蔵文化財センター講座資料=平成25年)

築造期を2世紀中ごろとする根拠はなんだろうか？ この遺跡からは吉備の土器編年の指標となる「鬼川市Ⅲ」（弥生時代後期後半とされていた）が出土している。ところが、国内の古墳時代を早くして、卑弥呼のいた3世紀に巨大古墳（箸墓古墳）

を持ち込むために、時代偽装が図られている。すなわち弥生時代と古墳時代の境を100年早めている。この吉備の土器編年図も、かつては「才ノ町」が古墳時代といわれ、三世紀の終わり、すなわち西暦300年前後の土器だった。

もちろん考古学者は根拠として「弥生時代最終末の『才ノ町Ⅰ式』と『纏向Ⅰ類』とが対応し、以下『才ノ町Ⅱ式』と『纏向Ⅱ類』が対応、『下田所式』と『纏向Ⅲ類』が対応、そして『亀川上層式』と『纏向Ⅳ類』とが対応する」と考え、「纏向Ⅰ類が箸墓古墳の時代」とする、「邪馬台国畿内説」に従っただけなのだ。「纏向Ⅲ類」が4世紀の土器だったら、こんなことは起きない。「纏向Ⅰ～Ⅲ」は4世紀だ。土師器についてのおこげを炭素14C測定法で測れば100年前後の誤差が出ることは科学的に証明されながら、耳を貸さない考古学者の蒙昧でしかない。

この意図的な100年の差を消しさえすれば、楯築墳丘墓の“王”は、新版エポック年代表の大乱直後の西暦185年の卑弥呼の女王就任から岩屋戸事件（248年）で死に、2代目の卑弥呼（台与）に政権を引き継ぐ249年までの54年間、さらに言えば卑弥呼の後半期（鬼川市Ⅲは本来三世紀中ごろの土器）に確実に重なる。

地域の考古学者が唱えるように筑紫から日本海沿いに出雲にたどり着いた文化は、そのまま越へと伝わる流れと、吉備へと流れるルートに分かれる。

越ルートには四隅突出型墳丘墓が、吉備へはその変形の双方中円墳（双方中方墳）が誕生する。鏡では見えなかった文化の流れが見えてきた。

＜おわりに＞

今回の論考では、神話の剣（刀剣）が国産か、輸入品化について触れてこなかった。それは「素戔鳴尊の剣」の時、述べた。引用してみる。

「当然、剣の制作地は大陸や半島製のものもあるが、徐々に国内鍛造に変わったであろう。古事記の岩戸開きの場面では「天の安の河上の天の堅石を取り、天の金山の^{まがね}鐵を取り、^{かぬちあまつまら}鍛人天津麻羅を^ままぎて、^{いしこりどめのみこと}伊弉許理度賣命に^{おほ}科せて鏡を作らしめ…」(「岩波文庫」倉野憲司校注「古事記」p 36)とある。岩屋戸事件で、剣を使った記述はなかったので剣は鍛造しなかったろうが、金属を扱う神・^{あまつまら}天津麻羅がいたことがわかる。「^{かぬち}鍛人」と言い、おそらく鍛冶職人だろう。すなわち、この時期には鉄や銅（自然銅か）の鉱石、あるいは砂鉄類を集め、たたらなどでの精錬、鋳込み、鍛造などの職能人がいたことになる。「^{まがね}鐵」といっているので、この時作った鏡は「鉄製」となるが、万葉仮名の「まがね」であって、文字は校註者や筆録者の解釈も入る。断定できない。日本での鏡の出土状況から見て銅鏡だったろう。

高天原時代、言い換えると邪馬台国時代には輸入刀剣もあったし、邪馬台国でも剣（刀）を作っていた。それらのいくつかは神の剣になったのだ。」

季刊古代史ネット6号で塩田康弘氏が「倭人伝を考える——鉄について——」で詳しく書いてある。「3 倭国における製鉄の可能性」では、いろんな製法をあげ、砂鉄からの製鉄にまで触れられており、伝承を中心にもものを見る立場の者にとっても、科学的側面からの援護射撃は大変ありがたい。

ただ今回は五尺刀も扱った。こちらは年代も前漢の物もありそうだ。この1m20cmもある五尺刀を見るとほとんどが、片刃なのに直刀である。日本や朝鮮半島では内そりの刀をよく見る。これは岡山県の備前刀剣博物館によれば、焼き入れの時内そりになるので、それを見越して外そりに整形しておく必要があるという。

しかし、前漢、後漢ともきれいな片刃の直刀が多い。その原因がわかった、同じ焼き入れでも水にくぐらせないのだという。そうすれば、湾曲は免れるが、日本刀のような切れ味は出ない。

実用性より形を重んじたのだ。つまり儀礼的意味、儀仗に役割が移っていたといえる。刀はやはり神としての役割が大きい。刀剣は国家形成の象徴であり、神なのだ。

<註釈一覧>

註1 【向日市・寺戸大塚古墳出土の鉄製素環頭大刀】 Youtube の銀座長州屋のサイトで画像が公開されている。向日市教委に問い合わせたところ、担当者はわからなかったが、



別の方が、「戦後の調査で、鉄の大刀が破壊された状態で発掘されている。京都大学の考古学教室で保管されている」と証言してくれた。Youtube での画像=写真=は同大で復元した大刀画像の可能性もある。

註2 【佐賀県吉野ヶ里市三津出土の鉄製素環頭大刀】 上記と同じく銀座長州屋のサイトで公開されている。佐賀市教育委員会文化課保護活用室に存在をご存知ですかと



問い合わせたが、知らなかった。発掘の届けも、発見の届けもないことは確認できた。美術商としての営業活動とみることもできる。

註3 松木武彦（まつぎ たけひこ、1961年10月30日[1] - ）は、日本の歴史学者、考古学者。岡山大学教授、国立歴史民俗博物館教授。著書には、弥生時代～古墳時代の日本列島史と吉備地域史の考古学的調査研究、戦争と平和の考古学的研究、進化・認知科学を用いた考古学理論の再構築、日本列島およびブリテン島先史社会の比較考古学的研究。

著書に『人はなぜ戦うのか 考古学からみた戦争』、『日本列島の戦争と初期国家形成』、『古墳とはなにか 認知考古学からみる古代』、『未盗掘古墳と天皇陵古墳』小学館 2013

『美の考古学 古代人は何に魅せられてきたか』新潮選書 2016 [2]、『縄文とケルト 辺境の比較考古学』ちくま新書 2017、『古墳』角川ソフィア文庫 2024。(Wikipedia)

註4 「一個人」の松木武彦氏インタビューURL = <https://ikkojin.jp/series/korimae-kofun001/>



プロフィール

いしあい・ろくろう NPO 法人福岡歴史研究会副理事長 石合 六郎 昭和 20 年 4 月、岡



山県倉敷市児島田の口に生まれる。児島高校を経て立教大学文学部史学科を昭和 44 年卒。同年山陽新聞社入社、政治部、整理部、東京支社編集部などを経て、システム部署で新聞データベース構築に携わり、平成 17 年システム局次長で退職。同社嘱託を経て、川崎医科大学に勤務、同 19 年退職する。

東京支社時代、取材で同郷の安本美典氏と知り合い、邪馬台国九州説に共感、その後、九州の遺跡探訪中に福岡歴史研究会の大谷賢二理事長と知り合い、同研究会古代史講座を立ち上げ、講師も務める。同会の古代史イベントを担当、歴史ツアーなどを企画、運営。地元吉備にも興味を持ち、伝承を調査研究。現在、同研究会副理事長。現住所は岡山市中区。

「吉備津彦命と温羅」 AMAZON で販売中

(ペーパーバック = 1 2 0 0 円 Kindle 版 = デジタル 6 5 0 円)



季刊「古代史ネット」のページ

季刊「古代史ネット」執筆記事一覧

吉備の古代史シリーズは季刊「古代史ネット」の第 3 回目から掲載しています。

第 1 回 二人の天皇が行幸された谷 (2020.07)

第 2 回 巨大古墳を考える (上) 吉備津彦の時代 (4 世紀) (2020.10)

第 3 回 巨大古墳を考える (下) 御友別の時代 (5 世紀) (2021.01)

第 4 回 温羅伝説を考える (上) —こんな物語だった (2021.04)

第 5 回 温羅伝説を考える (中) —成立過程とその起原「神仏習合の中から誕生」
(2021.07)

第 6 回 温羅伝説を考える (下) —桃太郎伝説の誕生「日本人の心映す鏡」(2021.10)

第 7 回 素戔嗚尊の剣 (上) —吉備のどこにあった? 「十握の剣流転の真実」(2022.01)

第 8 回 素戔嗚尊の剣 (下) —どんな形だったか? 「邪馬台国時代の北部九州と類似」
(2022.04)

第 9 回 造山古墳の被葬者を探る (上) 「吉備海部の娘・黒日売命か」(2023.07)

第 10 回 造山古墳の被葬者を探る (中) 「吉備海部は備中にいた」(2023.10)

- 第11回 造山古墳の被葬者を探る（下）「謎を解く肥後系古墳と血脈」（2024.01）
- 第12回 播磨の戦はあった!!—片山神社伝承が証明「稚武彦は再度播磨へ」（2024.04）
- 第13回 卑弥呼の剣と楯築の王 「日本海ルートでつながる筑紫と吉備」（2024.07）